

聖剣と魔竜の世界 2

サイトウケンジ





序 『魔竜世界』

The
World
of
Sword
and
Dragon

『それでは、聖剣と魔竜の交戦をご覧ください！』

『魔竜宣言』と呼ばれる世界中全ての回線をジャックして放たれた魔竜の姫、アーリアン
D Ⅱハクアの勸告がクリスマススイヴのこと。

それから一週間経った美影開発都市にある『美影神社』。初詣に来た人々が大量にいる
中で、ついに彼女の魔竜は姿を現し、その威容を全世界へと見せつけた。

『見て下さい！』これが『六皇魔竜』のリーダーであり、魔竜姫と呼ばれるアーリアンⅡ
D Ⅱハクアの正体——『究極の悪竜・ザッハーク』です！！』

それは無数の魔竜が折り重なって生まれた邪悪な城塞。

それは無限の魔竜が生息している魔竜の巣窟。

それは究極の名を冠する悪竜『ザッハーク』。

高さは一キロを超えており、街のどの施設よりも圧倒的に高く。圧倒的に天を突き。圧倒的に恐怖を撒き散らした。

その姿は美影開発都市のどこからでも見ることが出来たし、その映像をテレビ局が収めることも容易かった。

従って。その魔竜の姿は全世界に配信されることになり、新年で浮かれることもなく、多くのメディアがその映像を連日配信した。美影開発都市に住む人々は、様々な角度からその姿を動画で捉えてインターネットの動画サイトに投稿した。テレビでもラジオでもインターネットでも、連日その姿でもちきりになっていた。

魔竜ザツハーク。

一月一日に姿を現し、世界中の人が目の当たりにした魔竜の中の魔竜。

そして。

『そしてこちらの映像が、インターネットに投稿されていた動画です！』

レポーターが語った途端、映像はいかにも家庭用ビデオカメラで撮ったような画面へと変わった。手ぶれ補正が付いている優秀なものだったのか、画質が少しくすんでいること

以外は誰にでも見易い映像。

そこに映し出される、黒ずくめの青年。

『彼が聖剣を持った聖剣士です！』

黒いマフラーとミラーシールドのゴーグルで顔を隠し、青白い光を放ちながら飛行するその手には、二振りの剣が握られている。

『彼』はザツハークが放つ様々な攻撃——爪や牙は当然のこと。

炎であったり、電撃であったり、水圧であったり、毒の霧であったり、それらの一斉攻撃であったりを受けながらも必死に戦い続けていた。

映像の中では青白い光の尾が動く度に、ザツハークの放った何匹もの魔竜たちが倒されていく。その戦闘はまるで特撮映画のようで、アーリアンが魔竜宣言をしなければ、誰もが現実の光景とは信じなかっただろう。

『聖剣組織カリバーンから派遣された、最強の存在……那由他ハーンネス！彼こそが、この魔竜に唯一立ち向かうことの出来た聖剣士です！』

興奮気味にそう語るレポーター。

聖剣と魔竜。その戦いを追いつけていた映像は。カッ!!
 という強い光を受けてしまつて。
 そして、途切れた。

こうして『聖剣と魔竜』の存在は、全世界に確たるものとして広がり。
 人々を恐怖と不安の渦に叩き落としたのだつた。

魔竜の、思惑通りに。



第五話 『蒼竜宣言』

The
World
of
Sword
and
Dragon

『それでは、聖剣と魔竜の交戦をご覧下さい!』

一月七日の朝のニュースでも、既に見慣れた『魔竜特集』が始まつていた。

テレビ画面の中では、真剣な顔をした若い女性レポーターが見覚えのある神社の前で興奮気味に叫んでいた。あんなに強い語調なのに言葉が綺麗に聞こえる辺り、流石はプロフェッショナルといったところか。まあ、顔はウチの姉さんや母さんの方が美人だなあと家族の鼻屑目をなしにしても思うが。どうやら我が月夜野家の女性陣は、世間的にも結構なハイレベル美人だつたようだ。

「あ、カガリ、灯花。そろそろ私が映る」

ソファに座つて、俺にしなだれかかるようにテレビを見ているのは、アーリアンⅡDⅡハクア。通称アーリ。今レポーターが口にした魔竜という存在を率いる『魔竜姫』だ。

とはいえ外見はいたつて普通の……いや、かなり幻想的な外見だからまるで普通ではないものの、一応人間の姿をしている。

魔竜なんて物騒な名前だからって、別に体が爬虫類っぽい皮膚に覆われていたり、瞳孔が縦だったりするわけではない。ちょっと類を見ない美少女である以外は人間としての特徴しか持っていない。

服装も上は黒いハイネックのセーターだし、下はショートデニムを穿いている。更にその脚を彩るニーハイソックスのおかげでそのビククリするくらい素晴らしいスタイルの良さがありありと解った。俺がハイネックのセーターが好きだと零してしまったのを耳ざとく聞いていたらしく、それ以来しょっちゅうこの格好である。

つまり、こうして寄りかかられていると……触れた部分は柔らかくて温かいし、そのサラサラな銀髪からは良い香りがする。

年頃の青少年としてはドキドキせざるを得なかった。

「どうしたの、カガリ」

そして、アーリは俺が変に緊張しているとすぐに見破ってくる。

「お前、ちょっとくつつき過ぎだろ」

「そう？」

不思議そうに俺を見上げてくる視線は、透明感のある紫がかかったブルーだった。吸い込まれそうな瞳、とか。宝石みたいな瞳、とか。そういう比喻がよくあるが、アーリのその目を例えるならば静かな湖面のような瞳とでも言うのだろうか。話し方が淡々としているのも相まって、とてもクールな印象を受ける。

「別に素肌でくつついてもいい」

「良くないだろっ」

しかし落ち着いた外見とは裏腹に、こうしていやらしいことも平気で口走るから侮れない。主にツツコミの方面で。

「だ、ダメだからね、兄さん？」

くいくい、と反対側から服を引っ張られた。

俺を挟む形で座っているのは妹の灯花だ。困ったような、照れているような、下がりがちの眉をしている。ちょっと赤みがかった髪の色は母親譲りで。その体付きも中学生にしてはやや発育が良く、そこもまた母親譲りだった。

淡い色合いの厚手のセーターとフレアスカートという愛らしい格好と優しく柔らかな声は、俺の心に平穏を届けてくれる。

「大丈夫だ、灯花。突然俺がアーリと裸の付き合いとかしそうに思うか？」

「……少し」

少し思われていたのか……。

「灯花の同意も得られたところで」

アーリは俺に体を寄りかかせたまま、自分のセーターに手をかけた。

「待て待て待て待て！」

「ど、同意してないよっ」

「大丈夫。今はおへそまでしか見せないつもりだった」
 こいつの場合、その淡々とした態度のせいでもどこまでが冗談で、どこまでが本気なのかさっぱり解らない。ちなみにアーリの場合、おへそが見えるだけでもかなりのドキドキを俺に与えることが出来る。当人は気付いていないかもしれないが、実はそれだけで結構なダメージになるのだった。

「そんなことより、テレビを見よう二人とも」

脱線したのはアーリだった気がするが、まあいい。

この映像は元旦がたになったばかりのあの日。

俺と灯花が、アーリと戦った時のものだ。

灯花は、実は聖剣レーヴァ・ティンであり、その正体がバレしてしまった日でもある。

ちょっとした行き違いと、何やら恐ろしい陰謀めいたものがあつたせいでその灯花を使う俺とアーリは戦う羽目になってしまったのだが……。

今はこうして仲直りをして、一緒にのんびり過ごすようになった。

ちなみにアーリの家は俺たちの家の隣にあるせいで、こうして冬休み中はほとんど毎日遊びに来ているのだ。

しかし……。

今、テレビで流れている映像は全国に広まっているもの。

当事者である俺と灯花は否応おきなしに緊張してしまう。

アーリは堂々と『魔竜宣言』なんてしたくらいだから、メディアに出ることに抵抗はないのかもしれないが、一般人である俺や灯花にとってはいつまで経たっても慣れるものではないなさそうだ。

『ご覧下さい、見えますか？ 炎に包まれた神社の中から現れた巨体が！』

画面にはまず、燃え盛る神社が映し出され。そして巨大なシルエツトが現れた。こんな映像撮られていたんだな。つまり、あの参拝客の中には報道関係者もいたってことか。

幸いなことに、剣の姿になってしまった灯花はどんな映像にも残されていないようだった。突然炎に包まれた少女を撮影するような、心ない人物がいなくて良かった。

あの魔竜……『究極の悪竜・ザッハーク』を呼び出した、アーリの姿も撮られていなかったようだ。おかげで、その前に会話していた俺たちの姿も映らずに済んだわけだが。

まあ、普通あの場において注目するのは、そんな地面ではない。

目の前に恐ろしいほどの巨体が現れたのだ。人の目は『大きいもの』が現れた時に、そちらに意識を割いてしまうように出来ている。これは手品などでもよく使われるトリックで、大きなシルクハットを取り出した時は、さり気なく手品師の背中に回された手に気付けないものなのである。

ともあれ、ゆうに全長一キロ以上はあるらしいアーリの魔竜ザッハーク。

近くではなくても、神社の側で撮ったものならば見上げるような視点ばかりになってしまうのは仕方ないことだろう。

あの時は俺も至近距離から見ていたせいで『でかい竜で出来た塊だなー』くらいの印象だったが、こうして色々な方面からの映像でその威容を見せられると渋い気持ちになる。

無数の竜で形成された異形の城塞。それはもうおぞましいとか、恐ろしいとか考えるよりも、ただただ圧倒されるばかりだった。

きゅっ、と灯花が俺の服を握ってくる。

——俺も同じ気持ちだ。

こんなものを見慣れることなんて出来ないし、もう一度戦いたがっているアーリには悪いが、もう二度と対峙したいとも思わない。

こんなものに立ち向かうなんて正気の沙汰ではないと言い切れるレベルの、圧倒的質量と存在感がそこにはあった。

『こちらが『六皇魔竜』のリーダー、アーリアンDハクアの呼び出した魔竜ザツハクです！ 皆さん見えますか！ あの蠢いている無数の竜は装飾などではなく、一匹一匹が生きた魔竜だそうです！』

レポーターの声はやたらと興奮していた。

「なんか詳しいいな、このレポーターさん。伝聞形だし」

「うん、私がテレビ局に電話で教えておいた」

また、あっさりとアーリは連絡していたらしい。以前もアーリは仲間の魔竜がやつつけられた日、それをテレビ局に教えていた。やつつけたのもやっぱり俺なので、あの時も似たような渋い気持ちを抱いたものだ。

アーリにしてみると、メディアとか国家権力とかは利用出来る駒くらいにしか思っていないのだろう。魔竜とはいえお姫様ともなれば本当に堂堂としたものである。

「で、なんでまたそんな情報を流したんだ？」

「目立つかな、と思つて」

理由も単純明快。とてもあっさりしたもので、口調ものんびりしたものだった。

「まー……あんなのが現れれば、誰だって注目しちゃうだろうさ」

なんせ全長一キロといえば、東京にあるスカイツリーの二倍弱の大きさだ。美影開発都市のどこにいてもその姿を見ることが出来ただろう。こういう映像だって、街のどこからでも楽勝で撮れたに違いない。

神社が火事になった後、この世の終わりみたいな大怪獣の登場。

小さい子どもが見たらハラハラするのか、トラウマになるのか、それともワクワクしてしまうのか。

「せっかく世界的に放映されたのだから、目立った方がいいはず」

「……そういうものか」

そんな目立ちたがり屋と戦った身としては全くもって遺憾な話だが……。

元旦に起きたこのアーリとの戦いは、世界的に衝撃を与えてしまっていた。

無理もない。俗に特撮映画などで出てくる『大怪獣』といっても二十メートルから百メートルという大きさだ。いわゆるロボットアニメの主役ロボや敵怪獣だつて二十メートルくらいらしい。だが、アーリのザッハークはそれをあつさりりやうがと凌駕してしまっている。物理学的には自重がどうの、生物的にどうの、とそんな巨大生物が存在出来ない理由は色々あるそうだが、アーリたち魔竜はそもそもそんな常識が通用しない特別な幻想存在。映像で見れば分かるが、その頂点部分は空に届きそうなほど。

そしてザッハークは炎であつたり風であつたり水であつたり毒であつたりと、実に様々なものをその身から発射しているのだ。正に存在するだけで巨大な武装戦艦みたいなもの。ロボットの中に人々が住む街があるようなアニメもあつたが、つまりザッハークは人ではなく無数の竜が住む街そのもの、みたいなイメージなんだろうか。

そしてそれだけのキャパシティを持っていて、なおのんびり過ごすことが出来ているのが……ここにいる、アーリなのだ。

内側にあんなものを抱えているというのはどんな気分なんだろう。

俺の中にも結構危険性の高いものはいたりするが……それでもまだ、アーリの気持ち解る気はしなかった。

「何、カガリ？」

くてん、と首を俺の胸に乗せて尋ねる。

「うん？」

「私のことを考えていたはず」

たまに鋭いせいで、こっちの心臓はちよくちよくダメージを受ける。

このままくつついていると、いらんことまで見抜かれそうだ。アーリは方向感覚が破壊的な以外は割と出来る女なのだ。

「ちよつと熱くなってきたな、と思ったのさ」

「私がかガリを温めている……」

「なんか頑張っていやらしい意味に聞こえるようにしなくていいから、少し離れてくれ」
「……………じゃあ灯花ともかにくつつく」

アーリは俺に押しつけられると、そのまま立ち上がって灯花の方に寄った。

「アーリさん？」

「灯花↓。カガリがいけず↓」

ぎゅむっ、とそのまま灯花に抱き着くようにくつつき始める。

「うんうん、そうだね。よしよし」

灯花はちよつと照れながら、その髪をふわふわと撫なでていた。

これを見ていると、どっちが年上だか解らない。

ふう、と溜息を吐きながらテレビ画面の方を見る。
 どこかの屋上から望遠カメラで撮ったのか、ザッハークの全容が見えていた。
 遠くからでも解る禍々しい気配。

……あんなのと戦って、よく生きているよな、俺たち。

とても信じられないが、映像でたまーに黒い豆粒のようにチラチラつと映っている『聖剣士』というのが実は俺と灯花、そしてもう一本の聖剣である燐澄だった。

正に『魔竜のボス』と『聖剣士』の戦い。

各国報道機関はこの映像を率先して流し、魔竜に対する警告を発しているらしい。
 いわく『戦いが近くで発生したら、避難所に逃げること』。

美影開発都市には元々、市民が大勢避難出来るシェルターがあったし、日本の各地でも大慌てで建造計画が進行しているとか。

確かに他の魔竜はここまで巨大ではなかったものの、危険であることも確かだ。
 俺が知らないだけで、もしかしたらもっとデカイサイズのだっているかもしれない。

そして何より、俺だって出来れば本当は戦いなんてせずに、家族と共にシェルターに逃げ込んでゆつくり過ごしたい。

だけど、色々と巡りあわせというものがあって、実際そうもいかなかった。

別の聖剣士が来て、全部の戦いを代わってくれたりしないものか。

思わずそう願ってしまいつつ。

「あ、カガリ、ほら、ほら」

くいくい、と袖を引っ張られた。

「引っ張るなアーリ。見てる、ちゃんと見てるって」

「うん。でも、ほら」

ぎゅっ、とそのまま腕を掴まれて、またちよつとドキッとしてしまった。アーリの白くて繊細な指が触れているというだけで、なんだか違う意味で緊張してしまう。最近の俺は本当、アーリのその手のスキンシップに弱い気がする。

しかし、テレビに映し出された姿を見た瞬間。

「っ!？」

別の意味で心臓が思いっきり跳ね上がった。

「あ……」

灯花も思わず声が出てしまっている。

何故なら、画面いっぱいに映し出されたものは……ゴーストとマフラーで顔を隠した、とっても見覚えのある姿。

片手に漆黒の大剣、片手に両刃の光剣を持って空に浮かんでいる男。

つまり俺だった。

「ほらっ」

アーリは大変興奮気味だった。

「え、あ、う、うん、ええと、ええと？」

俺は大変狼狽している。

今までの映像では黒豆程度の大きさでしか映し出されなかった。だから、すっかり安心しきっていたのだが……。

『聖剣組織カリバーンから派遣された、最強の存在……那由他^{なゆた}ハーンネス！ 彼こそが、この魔竜に唯一立ち向かうことの出来た聖剣士です！』

え、なんで？ こんなに鮮明に？ っていうか見る人が見れば俺だって即バレじゃね？

内心混乱し過ぎて、嫌な汗がたらりと流れる。

「この撮影者は私だけでなく、ちゃんと聖剣士の方も撮っていた。偉い」

「そ、そうなんだな……」

どうやら、素人がテレビ局に投稿した映像らしい。

いくらゴータとマフラーで顔を隠しているとはいえ、髪型や体つきは完全に俺そのもの。いや、自分だからそう思うのであって、他人が見ればそうでもないんだろうか？

そうだな。人間、確証がないと『似てるな』だけで済ますよな。ははは。

ピピピピ。

俺のスマートフォンが着信を告げた。表示を見ると、俺のクラスメイトである雨流^{うりゅう}公^{こう}司^しの名前がある。

「はい、もしもし」

「カガリ！ 今、テレビを見ていたら、君そっくりな人物が聖剣士として映ってたぞ！ あ、あれは、もしかして、君なのか……!？」

「ははは、やだなー、公司ー。いくらテレビに映った人がイケメンだからって、それはなに決まってるじゃないかー、はははー」

白々しく聞こえるだろうか。いや、ここはいつそ白々しいくらいの演技の方が、むしろ信憑^{しんぽう}性を増してくれるのではないだろうか。

「そ、そう、だよな……す、すまない、服装も全くもってあの時のカガリと一緒にだったから動揺してしまったよ……」

……うん、確実に俺っぽいよな、それはもう。

ただどこかは、何があってもしらを切り続けるしかない。

露骨にバレているのに無実を主張し続ける犯人の気持ち解った気がした。

「ふう……急に電話して悪かった。今日は何をしているんだい？」

「うん？ 今日……」

「カガリー、まだー。電話ばかりしてないで私の相手をしてー」

アーリがよりによってそんな声をかけてくる。いやがらせついでのイチャイチャなら、せめて演技をしる。なんでお前のそういうのは大体が棒読みなんだ。

『……今のはアーリさんの声……そうか……こんな朝早くからカガリーと一緒にとは、なんて羨ましいんだ……そうか……邪魔して悪かったな、カガリー……』

なんかやたらシヨックを受けているようだ。まあ、あいつはイケメンなので誘えば喜ぶ女の子なんか大量にいるだろうから、同情はしない。

「うむ。それじゃな」

『そのカガリーの冷たさすら心地良く感じてきたよ……それじゃあ、明後日、学校で』

ぴっ、と電話を切る音すらもう弱々しく感じた。

……そういや明後日はもう学校開始か。

のんびり過ごせるのもそろそろ終わりかー、と思いかけて。冬休みは激動だったのを思い出す。むしろ学校生活の方が穏やかになるかもしれん。

「公司から？」

「確証が持てないのにあんないたずらしてたのか」

「割と本心だった」

「だとしたら今後は止めてくれ」

「解った」

ふう、と溜息を吐きつつテレビを見る。

俺たちの映像はもう流されていないようで、変なざわざわした気持ちも落ち着いていた。

明後日の学校でも色々言われるのかなー。やだなー。とほほ。

「ちなみに色々マスコミに流す私だけど、灯花が聖剣『レーヴァ・ティン』というのほどこにもバラしてない。私の身内にもバラしてない。そしてこれからもバラさない」

アーリはぎゅっと灯花を抱き締める。

「う、うん……ありがとうね、アーリさん……」

灯花の声はすっかり震えてしまっていた。だが、アーリがこう言い切るからには、あの聖剣が灯花である、というのは誰にも明かすつもりはないのだろう。元旦のあの日、剣の姿になってしまったのを何人かは目撃したはずだが、今のところネット上にその姿が流されたりはしていないはずだ。

「灯花は友達。聖剣だからって、それは変わらない」

「……うん。私も、アーリさんのこと友達だと思ってるよ。魔竜だったとしても」

この二人は、すっかり仲良くなっていた。

聖剣と魔竜がこうして解り合っているのだから、人類もみんな解り合えばいい。そうすれば戦いなんて起きないし、みんな平和に暮らせるはずだ。

だが、平和主義の灯花と仲良くしているアーリは全世界に向けて『恐怖推進活動』をし

たがっているような魔竜だ。鳥は飛ぶし、魚は泳ぐし、チーターは走る。それと同じで魔竜は恐怖させるものだ、と語っていた。

だとしたら。

だとしたら、俺の本質も……もしかしたらそっち、なのだろうか？

たとえ聖剣を二本扱えたとしても。

そんなのは関係なく。俺も魔竜である以上、いずれはアーリみたいに世界を恐怖に包ま
ずにはいられなくなるのだろうか？

……そんなはずない、な。

俺は頭を振って少し気持ち落ち着ける。

画面ではまだ俺の姿がアップになったままだった。

こんな映像のおかげでなんかマイナスなことを考えてしまった。正直、さっさと消したい。というか、ここから逃げ出したい。

「灯花のことはバラさないけど、彼とはいずれ決着をつけないといけない」

ビシッ、とアーリは画面の中の俺を指差した。

「彼こそ、私が本気になりたい人だから」

興奮気味に口しているアーリは、あれが俺だと気付いているのだろうか？

確かにあの時、俺はもう一人の聖剣娘である燐澄に森の奥まで運んで貰って、それから二人の聖剣を解放し、そしてアーリたちの前に戻ってきた。

——アーリの目の前で行ったわけではないのは確かだが。灯花が聖剣であることはバレてしまっていて、それを持ったままの俺が燐澄に連れ去られて。

そして燐澄の聖剣と灯花の聖剣を持った聖剣士がその森の方から現れたら——。

そんなの、聖剣士は誰がどう考えたって俺だろう。俺しかないはずだ。

だが、こいつは知らんぷりをして俺と接している。

それが天然なのか、意地悪なのかはまだ判明していない。スーパード方向音痴であるように、スーパード推理下手なのかもしれないし。例えばあの時は、灯花が傷付いてしまったショックであんまり詳しく覚えていないとか……。

こんな悶々とした気分、実に数日過ぎている。いっそ、灯花を使っているのは俺だー、とバラしてしまいたいと思う日も多かった。

だが、俺の方から「実は、あれは俺なんだ」とか言うわけにもいかない理由がある。

それは……。

「そして、私は彼のお嫁さんになりたい」

そのセリフを聞いて、こっそりと灯花が俺の腕をつねった。

ちよっと痛い。声を出すほどではないが、痛いものは痛い。

だがこれは理不尽な痛みではないだろうか。俺から何かしたわけでもなければ、灯花に直接関係ある話ではないのだから。いや、関係あるのか。なんせ本当に結婚してしまったらアーリが義姉になるのだから。だけどこれはそういうんじゃないやなくて、可愛いやきもちだ

と思われる。ブラコンっぽいのは認めるし俺もシスコンなのは認めているので、この痛みは甘んじて受けよう。

「その話は前も言っていたが、アーリよ」

「うん？」

「聖剣士との結婚でもいいのか、魔竜姫って」

「うん」

あっさり頷かれてしまった。

聖剣は魔竜と戦う存在だけど、別に滅ぼす相手ではない、とかなんだろうな。もつと言えば、アーリにとっては素敵な遊び相手、みたいなものなのかもしれない。

「どうしてそれを尋ねるの、カガリ？」

そして、じーっと……画面ではなく俺を見つめてきた。

「いや、そういうものなのか、と思ったんだ」

「うん、そういうもの」

こんなことをあっさり言われてしまったのは「実は、あれは俺なんだ」という告白は、「と、いうわけで結婚しよう」という意味になってしまふ。いくらアーリが美少女でノリが面白いからって、流石さすがにこれから高校二年になる身で結婚までは考えられない。

そもそも、俺はまだアーリのことをほとんどよく知らないのだから、そんなことまで考えられるはずもなかった。

そんな微妙に色々交ざった気持ちでテレビを見ていると、アーリは体を乗り出して画面に指先を触れさせ、つつつとなぞった。そこには——俺が持つ聖剣「レーヴァ・ティン」と聖剣「クラウ・ソラス」がある。

「この聖剣たちが灯花と燐澄かすみというのも運命的」

黒い大剣は灯花、そして光の双刃剣は転校生の燐澄が剣の姿となったもの。アーリはテレビに近寄ると、映っている剣たちを愛おしそうに愛でた。

「はふう……」

そのまま悩ましげな息を吐く。

「今度こそきちんとして、灯花たちとはラスボスとして戦いたい」

「ん……そう、なんだね」

灯花は困ったような返事をしていった。灯花としてはアーリとは戦いたくないのだろうけれど、アーリの気持ちも汲んでやりたい……とか、その辺りで迷っているのだろう。ちなみに灯花を扱う方である俺は、あんなバケモノとは二度と戦いたくなんてない。

「そろそろこの番組も終わるみたい」

アーリが再び俺の横に戻ってきて、定位置かのように寄りかかる。せっかくのソファなんだから、背もたれがあるというのに。俺の体なんか柔らかくもなければ寄りかかり心地だって悪いはずだ。悪い気がしないのが、我ながら困ったものだけだ。

画面にはいつしかスタジオとアナウンサーが映し出されていた。どうやらザッハークの

時間は終わってくれたようだ。
「なあ、アーリよ。お前は一回あの聖剣士にやつつけられたんだから、ラスボスとしての出番は終わりじゃないのか？」

おそろおそろ尋ねてみる。

ザッハークは正に『究極の悪竜』の名に恥じない強さを誇っていた。だが、俺は自分の限界みたいなものをとっばらうことなんだとかギリギリ勝つことが出来たのだ。

ラスボスというのはやつつけてしまったら、再び倒さなくて済むはず。どんなゲームでもそういうものだったりするはずだ。

「私はリベンジするタイプのラスボスだから」

「そうか……」

一度倒した後、何度もパワーアップして現れる系のラスボス。RPGのゲームなんかではたまにいるタイプだな。おかげで、敵につけ狙ねらわれる主人公サイドの気持ちは今ならよく解る。出来れば俺としては何事もなく、平穩に過ごしていければいいのだが。

「まだまだ見せていないザッハークの力もある。変身も二回くらい残している。つまり、あんなのはプロローグみたいなもの」

派手なプロローグだなあ。やつぱり、二度と戦うのはごめんだな。

次からはよっぽどでない限り灯花と逃げよう。そう誓う。

そんなのんびりした時間を過ごしていた、正にその時だった。

突然テレビ画面が『ブッン』と真っ暗になる。

故障かな？　と思った瞬間、すぐに画面が表示されて。

そこには『赤い悪夢』が立っていたのだった。



『これから魔竜による、全世界に向けての二度目の宣言を始めるよー！』

再び行われた全世界同時中継という電波ジャックは、またもその宣言から始まった。

『この宣言は、前回アーリちゃん……わたしたち『六皇魔竜』のリーダーである、アーリアンⅡDⅡハクアがやったように、色んな権力をドバーツ！と使って、従わなかったことも無理矢理従わせて、色んなメディアを通じて放送してますっ！ テレビ局の人とかマスコミの人はちゃんと広めて、知らない人がいないようにしてね？　してくれないと、

きつととっても怖いことになっちゃうからね？ あははっ』

画面に映る少女の姿は、明らかに十代前半。深く蒼い髪を肩辺りで切り揃え、美しさというよりは愛らしさを醸し出している少女。髪の色に良く似合う礼装を纏っており、どこか高貴さも感じさせていた。だが、そのつり目がちの大きな瞳はあくまで挑発的だ。これから自分が起こすこと、そしてこれから自分に起きること。それらを想像しては我慢出来なくなっているのか、好奇と興味の対象を常に探しているかのように瞳の奥が爛々と輝いている。

『と、いうわけで初めまして、の前に——みんな、聞こえるかな？』

自分の耳に手を当てて、何かを聞くような仕草をする少女。
やがて。

ブツブツブツブツブツブツ……。

地の底から響くような轟音が、画面中から……。
いや。

街の、至る所から響き始めていた。

『あはは、聞こえるのは……残念、美影開発都市に住んでいる人だけでした！ ちなみにこれが、今の様子です！』

パッと画面が切り替わると、そこには『美影開発都市』の航空写真が映し出された。楕円形の島——に作られた街の周囲を、何やら蒼黒い『壁』が取り囲んでいる。更に画面が切り替わると、そこは美影海浜公園。

巨大な客船が停泊しているその奥に、深い蒼の壁が見渡す限りに生まれていた。その高さは、ざっと五十メートル強。

都市の沿岸約一キロの辺りで街をぐるっと取り囲むように『海の壁』が生まれていた。それは大波や津波と呼ばれるものではなく、正に水の壁。

そして、音の正体は『海鳴り』。

海そのものが、美影開発都市に対して牙を剥いたかのよう。
美影開発都市は脅威に晒されていた。



『状況は把握してくれたかな？』と、いうわけで初めまして。わたしは『六皇魔竜』の一人、リヴィアアアウグストウス。アーリちゃんみたいに愛称はないから、そのままリヴィアアって呼んでね？』

まるでアイドルかのように、スカートを摘まんでちょこんと礼をするリヴィア。

一見して微笑ましい仕草だったが、この状況でそれをほのぼの眺める人はほほいしない。

彼女は『魔竜』。

この世界に存在している、恐ろしい力を持った眷竜。

外見は人間と変わらないものの、持っている能力は軽く人々を凌駕する。

文化や叡智がまるで通じない、恐怖される為に存在しているとされる凶悪なるモノ。

恐ろしいドラゴンの力を自在に使いこなす幻想種。

それがこの少女の姿をとった『眷竜』なのだ。

『それで、ええと。魔竜による全世界に向けた敵対宣言はアーリちゃんがしたから、わたしは私用でこの場を使わせて貰うね？』

リヴィアは床に置いてあったスケッチブックを持ち上げて、ページをめくる。

『元旦がえんたに現れた、超でっかい魔竜ザッハークっていたでしょ？』

そのページには、元旦に現れた超巨大な魔竜……『究極の悪竜・ザッハーク』が、色鉛筆でコミカルに描かれていた。ザッハークの足元に燃え盛る神社があるが、ザッハークの大きさはその神社を更に何倍もした高さ。

実際の大きさは一キロを超えるとも言われているほどの魔竜だ。

『わたしは、あれに次ぐくらい強い力を持っている美少女魔竜です。魔竜を出現させず、しかもこんな放送に出ながら、片手間であの海の壁を作っているって言えばどれくらい強いか解るかなあ？』

そのまま、今度はシルエットの竜が描かれたページを開く。周囲には青い水が立ち上っていて、真っ黒に塗り潰つぶされた竜の目だけが赤くなっている。

『これがわたし。どんなドラゴンなのかはまだ秘密ね。攻略のヒントにされちゃうから。あ、あと。わたしがアーリちゃんの次くらいの強さだからって甘くみないでね？アーリちゃんのはでっかい分、細かいことが出来ないんだから。それに比べてわたしの魔竜は、ピンポイント攻撃対応！決められた範囲だけ滅ぼしてねー、みたいな局地的な破壊に特

化しているの』

まるで友達にでも語りかけるかのように、満面の笑みを浮かべたまま告げるリヴィア。アーリが淡々と事実を語っていたのに反して、リヴィアは純真無垢じゆんしんむこに力を誇示しようとしている。

だからこそ、アーリの宣言に比べると――。

リヴィアの言葉には身近に迫る恐怖があった。

『と、いうわけで』

そしてべらっ、とめくった三ページ目。

そこには、街を包み込む大量の水の壁が迫っている絵があった。

『この街は完全に、わたしの人質になりました！』

リヴィアが両腕をバツと広げる。

すると、街を囲んでいる海の壁が『ドドドドド』と更に深い轟音を鳴り響かせて。少しずつ、少しずつその距離を詰め始めた。

『アーリちゃんは地味に恐怖推進活動をしていたけれど、わたしは派手にやらかすことにしたから。みんな、よろしくね!』

カメラに向かって、えへんと更に胸を張るリヴィアは。

『そして、この放送を見ている——アーリちゃんを倒した聖剣士くん!』

ピシッ、とカメラに向けて指を突きつけ、顔を寄せた。

『わたしの要望はひとつ。貴方と決闘すること! だから……』

そして、最高に満面の笑みを浮かべて。

『美影海浜公園で首を洗って待ってるから、今すぐ来てね! あはははっ』

自分の言葉が面白くて仕方ないのか大いに笑いながら——だけどリヴィアの目は、心底笑っているわけではなく。

『それじゃ、最後にお馴染みの一言で……』

と前置きをしてから、全世界に向けて再び告げた。

『さあ。『聖剣と魔竜の世界』を始めよう——!』



俺はポカンと。灯花は青ざめて、その宣言を見ていた。

『リヴィアは楽しいこと大好きだからやるのが派手。流石』

アーリは感心して頷いている。夢の中で見た姿、声、雰囲気……全てあのままだった。唯一服装だけは赤ではないものの、あの服は俺の脳内イメージだったのかもしれないのでそこは気にしないとして。

リヴィアと呼ばれた少女は紛れもなく、駆け出しの時に俺と灯花を倒した魔竜だ。

——そして彼女は、俺がいわゆる『魔竜の力』を発動した際、俺の精神世界に現れた存在でもある。

そんな彼女が一体何故……??

そういうえば、そんなことも言っていたな……。魔竜にもランクがあって、アーリのお供と一緒に住んでいるラストイアや、燐澄と一緒にやつつけた言都は『神話』クラス。そしてアーリは『大罪』クラス。

「そんなの何人もいるのか？」

「実際に強さを知ってるのは自分とリヴィアのだけ。名前を知ってるのは二人だけ。そっちは会ったことない」

「……試しにその三人はどんな名前なのでしょうか」

「リヴィアが『蒼銀の滅竜・リヴィアアサン』、残り会ったことない二人は、えーと……『聖魔の冠竜・レッドクラウン』と『夢幻の翠竜・ファフニール』」

「究極の悪竜・ザッハーク』であるアーリが同格だと思っているだけあって、かなりおっかない雰囲気の名前たちだった。滅竜とか聖魔とか夢幻とかなんだよ。こういう、強さのインフレっていうのは良くないと思う。まあ、ひけをとらないだけでアーリ以上とか、何倍も強いとかではないからまだましなかもしれないが。心底戦いたくないな、と思うくらいにはそれらは派手なネーミングだった。

後でこっそり、俺の能力を使って名前から情報だけでも調べておこうか。

そんなズルをしたくなる。

さっきのテレビの中では、リヴィアがノリノリで語っていた。灯花はあいつに倒された時の記憶が曖昧なはずだから、恐怖心とかはそこまでないと思うが。

それでも、俺が何度も夢でうなされていた相手。その度に心配してくれた灯花だからこそ、じっと大真面目に彼女の言葉聞いてるのかもしれない。

「出来ればアーリから、暴れたり大変なことをしたりしないように言ってくれないか？」

「それは無理」

「だよなあ……」

今でこそ魔竜たちは大人しく普通の生活などを楽しんでいるが、アーリが行っているのはあくまで『恐怖推進活動』。一般的な女子高生としても過ごしたいからか、極力人的被害は出ないように注意しているらしい。

こうして俺や家族と過ごしている間は本当に穏やかな女だが、世界的には着々と恐れられていくらしいアーリ。こいつのザッハークもそうだが、各国政府は他の魔竜たちに対しても警戒を強めているだろう。

世界がこんなにも魔竜を話題にしているというのに、俺たちはゲームしたりのんびり過ごしたりしていた。

台風の目、中心地点は穏やかかっているのは本当なのかもしれないな。

……さて。とりあえず、ついに宿敵である『赤い悪夢』がやって来てしまった。

しかも、いきなり『街』を人質にするという派手な演出をしつつ、だ。

そして要求は俺と戦うこと。つまり約束通り『本気』を見せないとイケないのだろう。

俺に関する情報ほとんどは筒抜けだとみて間違いない。なんせ、俺が魔竜の力を解放

した時、精神世界で出会って会話したくらいだ。そうでありながら、なおかつ上手く油断させる方法。そして、強い存在ならではの慢心を突く方法。これを——じっくり考えなくてはならない。

「うーむ……」

本当は『赤い悪夢』が来たら身を隠す予定だった。

アーリたちの時は突然隣の家に引越してきたから、そういうのが一切出来なかったものの。いかに『赤い悪夢』が俺のことに詳しくかろうと、この街には潜伏出来る場所がいくつも存在しているし、そういうのはここ数年でかなり押さえてある。そこに潜めばある程度の時間は稼げるはずだった。

その時間で逆にあいつの動きを探り、そしてタイミングを見て倒す。

これが考えられる中でも割とベターなやり方だったのだが。

………それも出来なくなってしまうたかあ………。

アーリには悟られないように脳内で呟くと、灯花が心配そうに見てくれた。

『兄さん、頑張るの？』

そんな視線を向けてくれる。

ここは兄妹のアイコンタクトで会話しよう。

『それしかないだろうな、とほほ……』

『よしよし。私も頑張るからね』

勝手に想像しているだけだが、灯花の心は聞いているだけで胸が温かくなる。

「む。カガリと灯花が目と目で通じ合っている。ずるい」

「仲良しな兄妹にのみ許される伝達術だ」

「そうなの。じゃあ私も妹になる」

「すまん、それはもう充分間に合っている」

灯花だけの良き兄でありたいのに、最近はずいぶん『お兄様！』って言うしな。

「やり手の兄なら十二人くらいの妹は持たないと」

「どんなヤンチャしたんだよ、その兄妹の両親」

思わず素でツツコミを入れると、アーリは驚いた顔で「ほんとだ……」と呟いていた。そんな常識的なことに気付けなかったのだろうか。やはりアーリは箱入り姫なんだな。しかし、そんなのんびりトークをしている暇もないのかもしれない。

既に街は大ピンチで。

相手は俺を待ち構えている。

だが、その前に……アーリを出かけさせなければいけない。

正体はバレバレかもしれないが、だからって『と、いうわけで行ってくる』とか言う『やっとかガリが自分から言ってくれた……ぼっ』とかなってしまい、結婚しなきゃいけなくなる。

それはそれで大変魅力的な誘惑だが、いかんせん俺はまだ結婚とか考えられる年齢ではないのだ。日本では男子は十八歳以上になつたら、だしな。それに収入とか暮らしとかそういうのも考えないといけないくなる。

なので、いかにしてアーリをこの場から一旦立ち去らせるか、だが。

「それじゃあ、カガリ、灯花、私はリヴィアに会つてくる」

助け舟は当人から出た。

「会う？」

「うん。そこには必ず、愛しの聖剣士が来るから。そこで『きゃー』とか、『がんばって』とか『だいて』とかチャホヤしてくる」

「待て待て待て待て待て待て」

「うん？」

「あ、いや……」

思わず止めてしまった。

「応援するのは聖剣士の方なのか」

「それはもう。愛しの聖剣士だから」

なんとなく灯花の視線が痛い、そこはグツと我慢することにして。

「そもそも、お前一人で会いに行くっていうのが無理だろ。せめてラステイが帰つて来るまで待つて、一緒に行った方がいいんじゃないか？」

「大丈夫、リヴィアのいる場所は海際。まっすぐ歩けば着く」

たとえ真直ぐ歩けば着く場所であつたとしても、こいつは筋金入りの方向音痴だ。どれくらいのリベルかと言え。今いるリビングからは玄関が見えているのに、この家から出ることが出来ないほどの。

「というわけでまた後で」

そして立ち上がったアーリは、俺の制止も聞かずにそのままつかつかと歩き出し――。

俺の部屋に向かった。

「そこは俺の部屋だ」

「……解つてる。カガリの部屋が好きだけ」

「好きなのは構わないが、今は仲間に会いに行くんだろ」

「大丈夫。カガリの部屋のエッチな本を探してからにするから」

「エッチな本持ったまま仲間と会うつもりかよ!？」

「それも辞さない」

「辞しておけ」

アーリが立ち止まると、灯花がぎゅうつとまた掴んでくる。

「……まだエッチな本、あるの？」

「灯花や姉さんが抜き打ちチェックするから、そういうのは部屋に置いてないのは知っているよな？」

「うん、でも、兄さんのことだから隠すのも上手いかもしれないし」
あんまり信用されていないようだ。トホホ。

姉さんは面白がって探しているだけなのだが、灯花は潔癖症らしくそういうエッチなものあんまり許してくれない。

まあ中学生の女の子というのはそういう時期もあるのだろう。

「え、銀髪美少女ものを隠しているの、カガリ」

「どこからそんな話題が出てきた。隠してないって言ってるだろう。なんだその特定範囲しかターゲットにしているじゃないジャンルは。部屋のどこを探してもそんなもんは見つからない」

「じゃあ、どうしているの」

「……何がだ」

「えーと……」

言いかけて、アーリは頬をぽっと染めた。

「……………そういうのを女の子に言わせるプレイは良くない」

「お前から言い始めたことだろ!？」

そもそもプレイってなんだ。全く。

確かに、アーリが性的なあれそれを口にするというのは、なんか背徳感がある。外見적으로는幻想世界から抜け出してきたような美少女っぷりだからだ。実際は俗っぽいというの

も、いっそギャップになっていて可愛いとすら思う。

「ともあれ、ミーハーしに行ってください」

そして今度は、何故か灯花の部屋に向かっていくアーリ。

「そ、そっちは私の部屋だよ、アーリさんっ」

「エッチな本は……」

「ないない、あるわけないってっ!」

「それは知ってた」

つまり、我が家はかなり性的にはクリーンということだな。姉さんが隠し持っている可能性は僅かに存在するが。

「じゃあ……」

アーリはまたリビングに戻ってきて、今度はペランダに向かおうとしている。ここはマンションの最上階だが、確かにアーリは落ちてでも無事だろうし、そういう外出方法もそれはそれで有りなのかもしれない。

「アーリ、ストップだ」

「うん？」

灯花が玄関まで走ると、アーリの靴を持ってきた。

「はい、アーリさん」

「ありがとう灯花。灯花はきつといいお嫁さんになる」

「え!? あ、ありがとう……」
靴を持ってきただけなのにやたら褒められた灯花が真っ赤になっていた。
うむ、大変愛らしい。

「じゃ、行ってきます」

何度目かの挨拶をすると、アーリはベランダをサッと乗り越越えた。

ドガン!!

という音が下の方から聞こえたが、俺と灯花はもう聞かなかったことにする。

あれくらいで倒せるなら、アーリはラスボスを名乗ったりしない。

そもそも俺と出会った時はもっと高い場所から落ちてきたらしいしな。

あれはとんでもないボーイミーツガールだった。

「それで、どうするの兄さん?」

「アーリが一人で辿り着けるとは思えないからな。このまま燐澄に合流する連絡をして向かうとしよう。灯花、準備してきてくれ」

「うん……解った」

灯花が駆け足で自分の部屋に向かうのを見送って。

俺は燐澄に電話をかけたのだった。

◆幕間——魔竜参謀 其の一——

カガリにかけた電話を持ったまま、俺はリヴィアによる魔竜宣言をパソコンのモニターで確認していた。

このパソコンにはあらゆる情報が映し出されるようにプログラミングしてある。詳細な映像データまでは拾えないが、俺の能力を駆使すれば状況はほぼ把握することが出来る。

これからカガリは、大罪クラスであるリヴィアと戦うことになり——。

あの『運命の魔皇竜・パベル』の力を使って勝つならばそれでいい。

使わないで勝てる相手ではないが、彼のことだ。様々なテクニクを駆使すればリヴィアの油断を引き出せるかもしれない。そうすれば、勝つ見込みもあるだろう。

そしてリヴィアが勝ってしまうなら……俺と日和会長が望んでいた『真の復活』なんてものは望むべくもないことだ。

「しかし……気に入ってくれたかいカガリ。俺が撮影した君の勇姿は」

元旦の日。

カガリの姿を撮ったのは、あの神社から逃げるといって体で単独行動が可能になった俺

だった。それをテレビ局に流すことによって、彼自身に対する揺さぶりをかけたつもりだったが……やはりGoogleとマフラーのせいで、いまいち効果はなかったようだ。

「まあいい、カガリ……君は、自分のトラウマである『赤い悪夢』相手に、どう戦うんだい。そして、どう倒すんだい？ 見せておくれ、その『運命』を変えると言われている力を。魔竜たちの、そして聖剣たちの神とすら言われる君自身の本気を見せてくれっ！」

口にするだけで、自分がどんな興奮していくのが解る。

俺は——随分と前、高等部に入學する時からこの街に潜伏していた。

アーリが率いる『六皇魔竜』に属することなく、ただただ『魔竜天使』である日和会長に従い、『六皇魔竜』を利用して、カガリの覚醒を促すために。

日和会長に至っては、俺よりもずっと前からカガリと過ごして機会を狙っていた。あの恐ろしい人がそこまで執着する存在——。

『運命の魔皇竜・バベル』。

それがどんなものなのか。どんな力を持ち、どうして神とまで称されるのか。

「さあ、見せて貰うよ、カガリ——！」

俺はそれを、この快適な部屋で見守るだけだ。

自らの手を汚すことなく、全てを操る者。

それが俺——。

『魔竜参謀』雨流公司だった。



最後まで立ち読みしてくれて
どうもありがとう！
続きは本で楽しんでね！